

## ジェイムズ・ジョイス 『フィネガンズ・ウェイク』 第3部第3章の概要(2)

著者	大島 由紀夫
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	11
ページ	33-47
発行年	2015-02-28
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1342/00000507/">http://id.nii.ac.jp/1342/00000507/</a>

[資料]

## ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』 第3部第3章の概要 (2)

大島 由紀夫\*

(Accepted October 20, 2014)

### The Epitome of James Joyce's *Finnegans Wake* III. 3 (2)

Yukio OSHIMA\*

**Abstract:** I translated into Japanese James Joyce's *Finnegans Wake* III, 3 (p.501.7 ~ p.527.2). In some parts I translated it word for word, but in other parts I just gave the gist of the sentences or the paragraphs. So in naming the title I used the word 'epitome,' not 'translation.' The epitome mainly treats Four Masters' inquisition on Yaun.

**Key words:** *Finnegans Wake*, Part III, 3, epitome

[501] 道具幕だ。用意しろ！ 客席に強い照明、舞台転換！ 幕を上げろ。電気係さん、よろしく！ フットライト！

—— もしもし！ そちらはセグール 58 かね。

—— つながりましたね。こちらコブラン 4015 です。

—— 大いに結構！ さて、ちょっと休んだ後だから、少しの間時間をさいてもらいたい。この尋問について言えば、マリワナ海溝の一番深いところを船で進む場合子供でも操舵できるが、それよりも浅いスイスの水路の場合でも、我々が測深していけば上陸は可能なはず、それと同じことが言えるのだ。ののしり文句を言い放つことも今は休戦だ。通話を切れ、これは最優先の電話だからな！ シビルからだ！ そっちの電話をとった方がいいのかな、こっちの方がいいのかな。これは【ケリー州の】シビル・ヘッドからだ。そっちの方がいいのかな。スポットライトをよく見ていろ。そうだ。非常によろしい。さて我々はまた磁場の中にいる。お前は日中雲一つない快晴であった、あの特別な真夏の夜のことを覚えているかね。雷に打たれたような衝撃を受けてもいいように唇を濡らしておけ。再び始めよう。フットライトの点滅や減光に注意してくれ。よくなったか。

—— さてね、あの夜のことは、『アイリッシュ・タイムズ』紙や『アイリッシュ・インデペンダント』紙や『フリーマーズ・ジャーナル』紙や『デイリー・エクスプレス』紙に載りましたよ。

—— まだ太平洋のどこかから電話がかかっているのか。これ以上はないかね。続けよう。あの晩、聖なるアイルランドのあらゆる禿げ山で火事があった。それで通信状態は

よくなったか。

—— 洞窟居士さん、それらは火事だったと言えるでしょう！

—— 大かがり火だったのか。そんなにはっきりしていたのか。

—— それ以外に、その火を表すのにふさわしい言葉はないでしょう。美しい大かがり火でした。青い髭を天に流していました。

—— その晩はきわめて眠れない晩だったか。

—— 人類が経験した中で一番寝られない晩でした。

—— 天の高みにいる我々の主は、谷間にいる我々の淑女のそばにいたのか。

—— 彼は主人の役目を果たし、頭のあちこちを白くして、幽霊のような姿で、鏡の中の、インドゴムでできた毯のような彼女の姿と結婚しようとしていました。

—— 主の祝歌を！ ひょっとして雨は降っていたか、もやや露はどうだったか。

[502]—— 大量に。大げさに言えば。

—— 思うに、象牙のように神聖な雪もいくらか降っていたのではないか、どうなのだ。

—— 7時に降りました。最高にすてきな雪が。丘陵に、そしてヒマラヤにさえ。

—— 風は吹いていなかったか。西風や東風が。吹き始めた時、かなり強く、不規則に、前よりもユーモアを伴わずに吹いたのではないか。

—— 全く冗談抜きで。ヒューヒューうなりながら！ 氷のような冷たさで。ブルルル、ブルルルル、震えてしま

\* Department of Maritime Systems Engineering, Division of Marine Technology, Graduate School, Tokyo University of Marine Science and Technology, 2-1-6 Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan (東京海洋大学大学院海洋工学系海事システム工学部門)

いましたよ！ 楽しげに意気揚々と吹いていましたね！

—— まだ電話が鳴っているぞ。番号を！ どうか穏やかにしゃべりたまえ！ あの幸運な裸体の月嬢は輝いていたかどうか、ひょっとして覚えているかね。

—— 僕の日中の恋人である彼女は確かに輝いていましたよ！ 一人だけでなく、かわいいお月ちゃんたちがペアになってね。

—— いった。いつのことだ。日付を言え！

—— 最近です！ 近頃です！ ついこの間です！ ちょっと前です！

—— 確かにそれは滑稽だったな。それで霜は降りていたかね。天気はどんよりとしていたかね。氷は張っていたかね。すぐ暑くなり、すぐ凍るような寒さとなる。冷えて暖かくなる。しかしたいていは乾燥している。それで大気のため息のような霧は、ボートの形となって辺り一面を覆っていたか。あられは降っていたか。火山弾は落ちてきたか。豪雨になっていたか。すべての人を喜ばすあらゆることが起こっていたか。

—— 大粒のひょうが大量に降っていました！ それ以上に濃い霧が立ちこめていました。大気の流れも生じ戯れています。完全に煮立つように激しく。寒さの極限でした。最高に凍える7月でした。

—— それは快適な環境だ。全く心地よい、快適中の快適さだ。それで人間の足に踏み込まれたことのないその谷では、あの有名な、煙のような第一級の濃い霧が形成されていたか。

—— かくれんぼができるくらいでした。悪夢でした！

—— 真夏の楽しい夢から真冬の譫妄へと戻ったのだな。あの乾燥した季節には、あの種の霧氷が訪れる感覚が期待されるのではないか。

—— 確かにその通りです。火を求める気持ちは、重たい、力のある馬をも引張るくらいに強烈でしょう。電話ですね、有線電話だか無線電話だかの。そしてさらに。

—— 冬の時化の波についてはどうだったか。

—— ダブリンの南のフォックスロックから北のフィングラスへと、波の泡が群れとなって浮かんでいました。

—— 海の景観か！ パノラマだ！ [503] 果てしない布状の地平線！ すべての結果が結び合わさり、方法の原因となる。雨用のドラムとか、風用の機械とか、スノーボックスとか。しかし雷用の金属板はどうだろうか。

—— ここには存在しません。一面の雲の下です。

—— 現在の共有地つまり庭園は、実際星月夜の今、割れた陶器や古くなった野菜が、ちりばめられた星のように臨席している会衆席となっているのか。

—— 全くひどい汚物状態です。常時悪臭が漂っている灰皿です。

—— なるほど。ところであの結びつきの強くない一級の夫婦が最初に出会った、あの有名な貝塚を知っているか。頭領フィネガンの場所を。若き貴族フィネガンの時を。

—— あの有名な貝塚なら確かに存じておりますよ。

—— フィンガル【ダブリンの一地区】でも彼らは会っていたのか。リトルピースに生え続ける木の下とか、スナッグバラのパブの「イエローハウス」とか、ウェスタリーヴとかアスタゴブとか、スラツェンドとか、ストックエンズとか、ウィニングズとか、フォリーとか、メリーフォールズとか、二人だけで、スキドゥーとか、スケプハブルとかで。

—— ゴッダメンディー【上記の各地名も含め、フィンガル地区の区画地】においても。あなたは恐ろしく口達者ですね。

—— その場所は死、審判、地獄、天国という四終の風にさらされているのか。

—— そうですね、仁愛に対して僕が期待することすべてが半分の真実性しかもたなくとも、実際、心から、固くそう信じて疑いませんよ。

—— この高原の地は悲しみあふれるデー人地の地底なのか。

—— 太陽なきアイルランドの黄道を回る太陽の下では、何であれ、実際悲しみがついて回ります。

—— 人目を引く三色旗【アイルランドの国旗】か。古い旗だ、冷たい旗だ。

—— フラッグストーン【敷石】ですね。深遠で重厚な墓のそばの。無益に追悼しています。墓にいる安息者を。

—— それでその墓誌には何と書かれてあるのだ。

—— 侵入者は告発されると。

—— 以前木がまっすぐに立っていたかな。あれは永遠に朽ち果てることのないトネリコの木だったかな。

—— 確かに以前ありました。アナー川のそばに。スリーヴナランド山の麓に。樫やトネリコや楡が。雪がブナの木の一本の大枝から吹き付けていました。そしてその木は、世界の被支配国の歴史の中で最も偉大な、最大の王冠をつけた神聖なるメイポールです。ブラウンの『植物の宝典』にもブリトゥルウェル出版社発行のノランの書にも、これほど優れた木は載っていない。というのも、我々はこの木の森によって食し、この木の林によって衣類を得、この木の樹皮によって船を造り、[504] 読む本はこの木の葉から成っているからです。その木、その樹木は、すべての樹木の中の王です。植物類の中の高貴で神聖な郷土であり紳士なのです。

—— さて、藪の中のミソサザエを隠すことはできないものだ。例えばその木はそこで何をしていたのか。

—— 我々と向き合って立っていました。

—— 夏の陽光の中で、か。

—— そしてキンメリオス族【ギリシャ神話中の霧と暗黒の中に住む一族】の暗がりのすみかで。

—— お前が隠れた場所からはっきりとその木を見たのか。

—— いいえ、目立たずに横たわった場所から。

—— 起こったことがなされたということ、その時立体的にお前は記録したのか。

—— その時は自分の占めた場所で横になっていたのだ。

す。もう言ったと思いますが。ちゃんとしていてください  
ね。

——空間の起源に少しばかり話題を戻すことにしよう。  
実際この卓越した巨人であるこの樹木氏は、序数で表せば  
どれほどに偉大なのか。谷間を見渡す鳥のような、お前の  
吟遊詩人的な俯瞰的見方ではどのようなものか！ 厳格な  
枢機卿の秘密会議の席でのように、我々の主軸たる君主、  
雷の神ゼウスについて、お前が胸の中におさめてあること  
を、古代イタリアに住むギリシャ人が受けた度をすぎた干  
渉を受けることなく、お前が我々に語るのを聞きたいと  
思っているのだ。サア、言ってくれ！

——紫の衣をまとった方よ、どうかお聞きください！  
猊下よ、高貴な方よ、そして繊細なる友よ！ チューダー  
朝の女王の芳しい侍女のような少女やアイダホの女店員が  
いました。彼女たち森の中の可愛い子ちゃんたちは、彼女  
の庇護の下で育ちました。ダブリンのおどけた若者たちが、  
甘い声でてっぺんにいるこれら鳥たちを揺さぶっていま  
した。【若者たちが投げる】オレンジやリンゴが上に乗っ  
かると、地上にぶつかっていました。タイバーン【ロンドン  
の昔の処刑場】にいるフェニアン黨員たちは、彼のナナカ  
マドの洞でいびきをかき、どくろマークが聖なる地面に  
散らばっていました。エラスムス・スミス少年院の犯罪者  
たちは、こっそりと鉛筆をもって、種の起原としての彼女  
の股に登っていました。可愛いシャルロットたちは、絹の薄  
い青のドレスを着て、駄目よと言いつつながらテナガザル  
たちに絡み、妖精のように振る舞いながら訳の分からない  
ことを言って、彼女たちのアナトリー君らに祈りの文句の  
滴を浴びせつつ、彼らの破滅に関わる破壊的、爆殺的な  
言葉を口にしていました。そしてキルメイナム監獄の囚人  
のような負傷兵たちは、気晴らしとしては異常ながらも、  
彼女の上に実っているクランベリーの実やリンゴを落そう  
と、彼女めがけて石を遠くから投げっていました。手に彩  
色を施した育ちの悪い少女たちは、彼からバンドをむし  
り取り、コマドリたちは彼のために、大騒ぎしながらヤ  
ドリギやトネリコのような彼の大きな体で大半の卵をふか  
していました。太陽と月がスイカズラや白いヒースを根付  
かせつつありました。[505] キベシリ【鳥の一種】はそこ  
にある樹脂をつつき、鷹は別の場所の樹脂を見つめていま  
した。荒野の動物は、引っ掻いたり、こすったりしようと、  
ツタに絡まれウロのある彼に近づきました。砂漠の独居性  
動物はその忌まわしい向こうずねを擦りむきながら、彼女  
の根を取ろうとしていました。また彼の実を取って、その  
22000個全部を彼から広く四方八方にはじき飛ばそうと  
していました。そしてそれ以前に、その場の無為な雰囲気  
に包まれた者と、彼女を貶めようとする胸が悪くなるよう  
な蛇の心をもった者とが、精巧に作られた非常に魅力的な  
サテンの服を着たこの女性の体を気まぐれにも欲していま  
した。そして僕の最も愛する彼女の葉は、あの晩から歌っ  
ていました。彼と彼女の太枝は一本一本すべて彼らの新し  
い世界において、災いの初めから災いの終わりまで、融合の

発芽を通して、互いに重なり合い、もう一度その曲がった  
手で互いに握手をしていたのです。しかも永遠に。前に進  
んで行きましょう！

——その木は非常に気品のある際立った姿なのか。普  
通の木とは異なる普通の木よりも崇高な木なのか。

——人間のように歩く木の中で、また天使のように嘆  
く木の中で、あのような木に匹敵する木を、僕は今までに  
一度も見たことがありません！ しかし長い年月の間に揺  
すられ、長い年月の間に裂け目ができています。

——その檜の木は真実を語るのか。

——数多く、数多くの中でも数多く。

——本当に自由の木なのだね！ しかしその下にある  
石は実際何を意味するのかね。

——死ですよ、死、あまりにも悲惨な別離をね！

——今分かったぞ、暗い魂の持ち主君！ 無限の真実  
を有する有限の人間という訳だな。形態は男で性別は女な  
のだな。なるほどね。ともかくもお前自身その木から派生  
したのだな。つまり真実の樹木からさ。科学が何を言うか  
聞くことにしよう、次善の王たる博学者君。言ってみたま  
え。

——リンゴの木です。

——そう言うと娘たちの嘆きが思い出されるかね。

——それはまた、分別の停止にまで遡ります。

——見て見ぬ振りをする間男、酔っぱらい、種まき人  
間という訳か！ この墮天使からはどんなに隣の悪臭が漂  
っていることか！ それで強烈なパンチが、このならず者  
を奴隷状態へと打ちのめしたが故に、この樹木天使は破滅  
しかかったのではないか。

——そうですね、彼は相変わらず以前の彼で、動物に  
対して不品行な行為をしていましたよ。[506] というのも、  
蛇が上へと登らないうちに、自分自身のあだ名をあらゆる  
ガマやアヒルやニシンに付けていましたからね。また公園  
の中央の丘をうろつき回ったり、彼の奥さんが口にする地  
口を使って、奥さんにおべっかを言ったりしていました。  
彼はよく僕たちに3樽もの酒をおごってくれましたよ。こ  
れがああ店の主人にとって少々うとうとしかつたのです  
ね。主人はあの大先駆者を怒鳴りつけたのです。先駆者は  
彼を最も腹黒い蛇呼ばわりし、その屹立するところを縮ま  
せ平らにし、その乱れた生活のバランスを恥じ入るようど  
やしつけたのです。

——アア、フィンに冷たい棺の中に横たわるか！

——アダムの罪です！

——紳士君、お前はそこにいたのかね。谷間で彼ら  
が彼を逮捕した時にそこにいたのかね。

——僕、僕ですか！ 僕は、僕はね！ 時々恐怖にと  
らわれ、ブルブル、ブルブル震えていましたよ。

——悲惨な話だ！ 悲しむべきことだ！ ではそう  
やって彼はああ三人の男の敵となった訳だな。

——そうですね、素面になることも静粛になることも  
なく、真の同胞たる人間の中で最もご立派な人間でした。

木に住む蛇としての父でしたね。

——頭を岬としているこの人物に、お前はどれほどの親近感を持っているのか。

——我々の間には乾いた寒冷の日中のような時もあります。こういう時には彼はずっと離れたところにある簡易宿泊所のようなです。また風の鳴る湿気の多い夜間のような時もあります。こういう時には、彼はあらゆる手段を講じて、僕のためにオニオンスープを作ってくれます。

——さて、お前はランズダウン通りにあるあの痕跡地に近づいてきたな。彼女はその辺りにリンゴをばらまき、そのリンゴどもは嫌悪感をもって、急いでこの聖なる土地を離れたいという気持ちを実らせた。サア、いばらに生まれたる者よ、このスポットライトをたどって行きたまえ。ある男子に関してだが、お前はまたの名前を触り屋トム——事実奴はこの名前の通りだ——という異端児を知っているか。フィネガンが生活環境となっている奴なのだ。その立場となったとして自分のことを考えてみよ、そして自分の言葉に気をつけよ、そして私の忠告を受け入れよ。お前のモットーを「雲の中の一点の輝きとなる」とせよ。

——決して僕の母と彼女の生活の場については気になさらないでください。考えるに、もし自分がそのようなことを気にかけるのなら、僕はありがたい忠告をひどく恥づかしく思いますので。

——彼は50歳くらいで、ミルクとウィスキーを入れたダブリンのアン・リンチの紅茶が大好きで、人のために使い走りをしたり、蚤を背負った老犬よりもほこりをかぶっていたり、石を蹴飛ばしたり、[507] 雪を塀から払いのけたりしている。今までにこのトムとかティムとかいう奴のことを耳にしたことがあるか。うつろな目をしたこの男は小作制が敷かれたキメージ【ダブリンの一地区】にいて、精神的におかしい奴で、おかしいからこそ本来の奴でいられるのだ。時間の大半を「グリーン・マン」【一般的なパブの名前】で過ごし、そこでものを盗むは、あくびをするは、ゲップをするは、毒づくはで、閉店時間になってもそれから2時間くらい、馬賊のような客相手と言い合いながら、コートを裏返しにして着、靴下をゴム靴の上に出して、陽気に飲んでいて。弱々しく手を叩くかと思うと、定期的に居酒屋好きの大衆と交わり、大人をも子供をも、腸弦のようなベルトで音を立てて打ち付けるかと思うと、仮小屋の前でいつもぼろをはためかせて肌をむき出しにしながら、衣装を着けてワルツのような格好で、アイルランドの神、長い腕のロッホのように踊るのだ。紅茶を飲み終わった後

——あの男のことですか。あの弁護士たちのようにひどく頭のおかしい人間のことですか。彼に接触してご覧なさい。弁護士たちが彼のズボンのすねやベレー帽の後ろの汗取りにくっついて離れないでいます。彼が僕にキスしたのは1回にとどまりません。こう言うのも残念ですが、もし愚行を僕が犯したならば、主よ、許したまえ。アア、後で言うのでどうか待ってくれませんか。

——まだ、そうするつもりはないね。

——ではお聞きください！ これから彼がやったことを申し上げます、言うのも軽蔑すべきことなのですが！

——言ってしまう。この表六玉！ 最大の苦勞を伴いながら形成された我々の母国語から見れば、目立って奇妙きつな言葉をね。お前も待ってられないだろう！ 101回もやったのか。単なる無言劇の形でやったのか。最近やったのか。

——どうして僕に分かりますか。僕の与り知らぬことです。兵舎の通行手形でも買って【兵士たちに聞いて】くださいな。おまわりさんにでも聞いてください。強盗たちに言ってくださいよ。

——お前はオコンネル南通りのピックポケット【すり】のことを言っているのかね。

——ペキンの郵便船を、僕は馬鹿にしているんです。でもローラ・コナーのトリート【もてなし】からは逃れています。

——サア、お前の記憶をちょっとばかり洗浄し整えてみよ。かの男、つまり早くから気の狂っていたレンガ職人である、今ここにいる男の父親に関して、私は心の中で本当かどうか訝しんでいるものの、我々の契約の箱にかけて言うが、彼はメソジストの触り屋で、他の者も言うように、実際の名前はトムではない。このブーターズタウン出身の世紀の好色漢は身震いのウィリアムで、今まで言い触らされた奇人の中でも最も愚かな奴で、「ビッグ・エルム」や「アーチ」【いずれもパブの名前】で、いつもあの男と一緒にいる。[508] 悪行により歯が口腔から抜け落ちた後でも。彼にはアリア人の血は海拔0センチも混じってなく、5.73パイントも飲んだから歯が抜け落ちたのだ。麦わらでできた煙突帽をかぶり、ビール粕模様の、後ろにボタンのついた、「記憶にとどめよ」という彼のモットーの書かれてある、衣服とも言えない衣服を着てうろついている。表面的にはこのモットーの文句は、平穩で画期的な、公現祭に行われる結婚式のために書かれてあると思うのだが。

——確かに訝しんでいらっしゃいますね。いや、公平に見て、彼もまた心の中で自分の問題がどうなっているのか考えていたと、必ずやあなたは思っただろう。というのも、こう言うのも残念なことなのですが、こともあろうに、あれが彼からずり落ちようとしていたのですよ。

——何と奇妙な公現であることか！

——どんな風にズボン下は落ちようとしていたのかね。

——まさにあのよう。

——あるものを必要とする者は、その必要とするものと下腹部の衣類のことを知っている。男は誰でもミーガー【ズボンの一種？】のことを気にかけるのかね。安物でも？ 当て布がしてあっても？

——そうですね、【一つが外れれば】うまくはまっている別のボタンも外れてしまうのですよ。

——金髪男のはったりだ！ 荷物を積んでこっそり港に入る船のようなものだ。例えば次のような荷物。

—— インチキカメラ、くずとなった釘、切られた羊毛、いかがわしい酒、へんてこなキルト、つかの間の享楽、などです。

—— 音楽が奏でられている中、彼女たちから見ると、その半円球（臀部）をへこますように見えるが、【彼女たちの後ろから見れば】それとは正反対のことをしながら、パトリックのペットであるあの気高い慎み深い尼たちは、必然的变化が起こった時【尿意を感じたこと】、二人とも同じまじり事態に陥ったのか。あらゆる快楽を味わわせる少女であり、すべての人が追い求めるあの女の子たちは。

—— ここだけの話ですが、比類のない下着をつけた、町の皆がプランクウィンを見て以来これまでに僕が見た、僕が見ている、そして僕が見るであろういたずら好きの少女の中で最もかわいい少女たちでしたね。

—— 彼女たちはセックスアピールのきいた、すねた顔をした、太めの女の子だったか。

—— 男の子も女の子もあっけにとられた目で、穴の開くほど見つめていましたよ。

—— これら二人の女神たちは彼を訴えようとしているらしいが。

—— そうですね、逃げだして彼を撃たなければいいと思っただけですがね。

—— 二人とも白と黒の鍵盤を使ったピアノの芸術家、そうではなかったのかね。

—— 見かけではバッハのような女の子たちと、僕は記しましたが。右手のためのエチュードを弾いて、栄誉の座を得るために勉強していますよ。

—— その時彼女たちはいたのかね。そしてまた、彼女たちは見つめていた者としてのお前を見つめていたのかね。

[509]—— そのような不確かな話をどこから聞いたのですか。こんな話は僕の経験とは一致していない。彼女たちは見つめられている者が見つめているのを見つめていたのです。みんな見つめていたのです。

—— よろしい。その見つめていたこと【女子がHCEを見つめていたこと】については簡単にすませて、この見つめていたこと【HCEが女子を見つめていたこと】についてはもっと長く扱おう。さて、敵国人たる友トムスキー【HCE】について再度言うならば、彼が口を滑らした事柄からお前は多くのことが分かったのか。私たちはそのことを聞くためにここに座しているのだ。

—— 僕は殴り掛かっていきたいくらいに怒っているのですよ。嘘ではありません。彼の不格好な帽子のことをね。

—— 怒っていたに違いないと思っているよ。

—— あなたはひどく誤解しています。でもまた僕は彼が気の毒でならないのです。

—— なんだって、ションン！ まさかそのようなことはないだろう。あの時彼のことを怒っていたことを残念に思っていたのか。

—— 完全に殴り掛かっていきたいくらいに自分に腹が

立ったと僕が言うのは、彼のことを気の毒に思ったから腹が立ったのです。

—— そうなのか。

—— まさにその通りです。

—— あらゆる場合に彼のことをお前は非難するのだろうか。

—— 経験を積んだ多くの老練な人たちが言っていることを僕は信じますかね。でもギリシャ人にとって南と思われたものも、非ユダヤ人にとっては北と思われたのです。またカイロで猫を殺す者も、ガリアでは鶏をなだめすかすのです。

—— あらゆる女たちが彼に対して愛のため息をつき、彼に立ち向かい、彼を得ようと競い合ったのは、彼のつばの垂れた帽子のためだった。このことは、彼が絶頂期にあった時のことにすぎないだろうが。フン、どうなのか。

—— プタメイヨ【ブラジルにある地名】やカンザスやリベルニア【今のクロアチアの一地域】やニュー・アムステルダムを経巡った後では、僕はそんなことにはまるきり驚きません。

—— あの毒麦とこのモグラ、お前の涙と我々の笑み。女の目が我々の破滅の元だったならば、それは偽りの人生なのだ。そのような人生には幾重にもふたをせよ。心の眼で彼のゆがみを矯正せよ。私の鼻を膨らませよ【私の心を奮い立たせてくれ、の意味】、私の耳からあのハサミムシを吹き飛ばしてくれ。

—— 彼は彼のあばずれの誕生には両方の眼をつむっていられるでしょう。自分の運命を彼女の演技の半分までかかわらせるだけなら我慢していられるでしょう。でも女の笑劇全体には、笑ってすますことはただただできないでしょう。というのも、彼は笑ってすませるようには出来上がっていないからです。そこで彼は、私に触れてはいけないというイエスの精神を発揮して、自分の心と即座に相談し、ズボンをおろして、未だ悪臭漂う第一級の個人的な詩【自慰行為】を創ったのです。身を汚さないまま。

[510]—— 爆弾や重たい落下物がたてる轟音のような話かね。

—— あなた向けの話ですよ！

—— この話はとてもスケールの大きな話で、お前が言うように、マンモスのようなお前の息遣いもほとんど止めてしまうくらいだ。彼のズボンが難しい状況にあるため、お前ら騎士たちも大変不安であろう。無益になされた愚行をして、美德から成る愚行を大目に見させよ。私の良き注視者君、真夜中のホイスト大会のあとセックスした朝早くに、結婚する者たちが何人いたというのか。

—— おそらくそれはお答えしかねるでしょうね。彼としては高貴なことですし、彼女からは威厳が漂っていますから。彼に対しては崇高さをもって。彼女からは威厳をもらって。しかしタミー・ソニークラフト【HCE】について彼に是非一言お言葉をくださるよう、市長閣下と市長閣下夫人とウェールズの王女様に申し上げておきます。

—— サア、スコットランド銃撃兵からギネス社の速記者までの諸君。テイラーズ・ホールで開かれる宴に来たれ。メイラーズ・モールで楽しくやろうという訳だ。鶏が朝を告げるまで食い、飲み、馬鹿げたことを楽しくやろう。目覚めよ！ 来たれ、徹夜祭に！ 聞くところによると、下界の皆、つまり実際昔からあるリーキング・パレルの居酒屋に普段いる連中は、なぜだかみんな二人対二人となって飲み、酔っぱらったそうだ。めかしこんだおしゃべりな人間たちは転落した乞食たちと、アイルランド警備兵たちはブランディーやらワインをたらし込む銀行強盗と、食事の間に間を置く真のフランス的なやり方で、やせこけた銀行員までもが。この話のとおりなのか。そこでは、何本かの棍棒が、ウェレズリーが関わったボトル騒動の伝統に従い、吐き気を催すほどに下品に扱われ、何枚かの皿が投げられ、フィン島の名譽を祝した入れたてのビールの飲み残しのタンブラーが、それとは無関係に転がり、次に、ヘヴン・アンド・コヴァナントで出される、結婚式での料理のような豪華な朝食が出され、そしてその間、うつろな音でラジオが、有権者にむけた彼についての報道がどのようにすべての人にしっぺ返しを食わすかを、スカンジナビアでの略奪事件の時のように、沖合でグラグラ揺れている船の中と上で伝えていたという話だ。エッ？ この話もまたほら話なのだろうか。これは祖先のアーサーの話だったとか、これは彼の白馬の話であったとか、いうことになるのか。船はどうなのか？

—— そうですね、当然彼は、紳士淑女方、責めさいなまれていました。イニスフェイル【アイルランド】の歌を歌おうと、客たちは海を越えてあらゆる国からやってきました。水割りウィスキーを飲みながら！ 厄介な女も気が進まない船長もいませんでした。でも、あの正しい尊師ホプシンボンド氏や、あの選ばれた花婿であるフィジー・フローフロー師は十分素面でしたよ。彼らは素面だったと思いますよ。

[511]—— お前は那点正しい畏敬の念について逆方向に考えている。ノルウェイの船長【HCE】にとっては、マグラスが結びつくべき一番よい相手なのだ。我々の目の前にある新聞が伝えるように。お前は彼に会ったか。あるいは不適切ではないと思われた時に見かけたか。おそらくスレーター【ハンマーを使った殺人の容疑で19年間牢に入った人物】が使ったハンマーを持っていたのではないか。あるいは彼は病だったか。

—— ほとんどお目にかかりませんでしたね。12時の鐘が鳴った時には。きっと間違っているのですが、尊ぶべきでないマグラス氏が、吃音の人物【HCE】を探し求めながら、聖具室のあたりで、アカキツネに似たよき老人の寺男を、この二人が腹黒い儀官と陰鬱な衛士になるまで、蹴って寝わらから追い出す音が聞こえていました。その間僕とフラッドと他の奴らとで、まさに兄弟姉妹のように、広間で悪魔の女王たる彼の奥さんの心をくすぐり、大笑いさせていました（彼女の腹がよじれるほどにね）。上品な

微笑を浮かべたかと思うと、馬鹿笑いしていましたよ。

—— 忠実で妻にふさわしい女性だった！ 笑い上戸で百日咳患者だった！ その一方で淑女である彼女は男たちの情熱の的でもあった。しかし確かにお前は個人的接触を成し遂げたのだね。補足的に、あるいは議事進行上の問題として【現在も続いている、の意味】。

—— その特別な問題は、僕の金銭的要求の問題を越えた問題です。僕はひとかけらのチーズに基づいた生活をしていますが、しかしその接触は、1パイントのビールからだったと声を大にして言います。

—— お前はカモなんだよ。しかしあの臆病者があの助平爺に言ったように、これはすべて、あの女が馬鹿笑いするためだけのことだったのではないかね？ 女たちは有害で軽薄で曖昧な態度をどこから受け継ぐのかね。

—— ただそういうことにすぎなかったのでしょうか。女は女を感化し、男は男に感化されるものでしたから。

—— 騒々しくも心のこもったところがない。お前が言ったのは、<sup>サルーン・バルケッド</sup>船室の隔壁だったか、それとも<sup>トワイニング・デック</sup>甲板と甲板の間だったか。

—— <sup>ビトウイン・ドリンクス</sup>飲んでる最中に、ですよ。答えを繰り返すのは嫌なんですけれどね。

—— 彼女は夫の趣味に合う下着をつけていたか。マッサ【イタリア、トスカナ地方の町】で売っている星模様の奴を。

—— 焦らし屋夫人のことですか。ふわふわしたパネル【スカートなどに別布で縦に入れた飾り布】をつけ、音を立てずに滑るようにとれるズロースをはき、肩には一束のクローバーをつけ、薬指には真鍮の指輪をはめ、丸めた舌には多くの嘘をつけていました。

—— それがあの耳寄りな情報だったのかね。その情報はあのならず者を悩ませ、あのならず者は大衆を惑わせ、大衆はレイプについて騒ぎ立て、そのレイプのために、あの女を抱いた蛇野郎は裁判にかけられたのだ。

—— 冗談を言って人を担ぐという、悪ふざけの体裁をとっていたのです。

—— 急所は下らないことについての冗談か。

—— 冗談に包まれながら、話は高まっていったのですよ。

[512]—— なんということだ！ そんなことを言っただけなら！ すべてが彼女の世界をひっくり返したのか。そのためにお前たちの間に重大なことはなかったのか。それで、乾物屋であり、イゾッドの父親であるあの男はその時どうしていたのか。

—— いや、元気でしたよ。熊にも立ち向かう野獣のような、シャツと立ち襟カラーをつけたあの雄牛のような男は、濃いワインカラーの水路を行く我らのマゼランは、リフィー川から生命を搾り取っていました。

—— クリストファー・コロンブスカ！ これで納得がいった。よく分かった！ 彼はやってきて、キスして、征服したのだな。禿鷹やカラスのように！ 彼女の目の中の

光をなだめすかすのに酒が必要であった。この仮面舞踏会のあのマスクをつけた美女を！ 美しいアンナ・ルブラ・プルーラベルを、そうだな！

—— その通りです。あなたの声はサピナ教会の鐘の音のように、10トンもあるような荒々しい声ですね。そうです、そうです。彼女はしなやかで快活でした。【電話でそのような声を出すなんて】あなたは横たわっているのですか！ 座っているのですか、立っているのですか。

—— 行動が早ければ早いほど、目の不自由な者も助かるものだ。しかし男は強ければ強いほど、とるべき途は狭くなる。勝負する時には幅の広い行動をとれ。精力的なユグノーのクロムウェルたる HCE が、反儀礼的な異邦人たる ALP の周りを回っているのか。それとも文字を持たないパタゴニア人たる ALP が、放浪の探検家の鍛冶屋たる HCE に降参したのか。

—— あなたのおっしゃることは本当だと思いますよ。本当に最高の言葉だ、アア、本当に！

—— 手に負えない悪童よ、我々はどこでもお前とともにいる！ 今はコーヒーではなく、暖炉の上の紅茶の方が元気を与える。そして石炭が炉火を興す一方で、薪がパチンと鳴って多くの喜びを与える。そのような状態で彼女は彼に耳を貸し、彼の男性性を耕し（いや、そのように見えるのだが）、彼の館を借りたのか。情熱的なまなざしと、悲しげな髪と、ジンジャーワインを飲んだ時の、口から漏れる、朝のダブリンのバーのような病的なため息とで。

—— あなたが初めて僕の耳に穴を通してくれました。

—— 体の一部はその全体よりも重要だと彼女は言っているが、私の声が耳に穴をあけるほどというのは、私の運命なのかね。

—— 運命に定められていると思われているのですか。あなたの声はソフトですよ、親愛なるお口の上手なフォードさん、そんなに大きな声をもっていらっしゃるとは知りませんでした。

—— それが答えなのかい。

—— どうですかね。

—— その宿はティルタスと呼ばれている橋のそばのトゥート・カム・イン【ツタンカーメンのもじり】だったのだ。しかしお前は古代エジプトの年歴がなくなった後でも太陽の存在を信じるごとく、完全に確信しているのか。時代の秩序の再生、それが起きるということを。

[513]—— どもりながらもその裏で、心の底から、穏やかな気持ちで、確信しているのです。世界についての裁定は揺るぎないものだということを。

—— 日付はいつなのだね。お前の浸礼の時の。我々はまだ疑問に思っているのだよ。

—— 西暦です、ヨークの侯爵様。1132年です。

—— それであの頭のおかしいジョーンはどうしているのか。あの苦難の子は。

—— 自分の生殖器のように充実していますよ。その爪を見れば、ライオンであることが分かるというものです。

—— それで、ドルフィン・バーンの、つまり（他の者が言うところの）トップハット【エルサレムの南東にある死者を焼くところ】にいるジェムはどうしているのか。

—— カレンダー上のイースターの日の太陽を表すかのように、舞踏病にかかりニジンスキーとなって踊っています。悪徳ですね！ 今日は陽気なタランチュラを！ 彼がポルカを踊るのを見るべきです。ワルツを踊る時の彼が発するにおいを嗅ぐべきでしょう！ 丈の短い服を飛び上がらせながら、彼の汚い足が叫んでいるのを耳にするべきです。

—— 酔ってルンバを踊るコロンバスといったところか！ 確かにチャルダッシュの帝王だろうよ！ 踊る宗派ダルウィーシュの喜び狂った信者でもある。思い出す限りオルトヴィートだ。彼の血の中には悪性インフルエンザのような、飛んだり跳ねたりすることへのパンタローネ的愛情があるのだ。

—— 危なっかしい老いた膝を使いながら、この麻痺したトロイの老王プライアム【HCE】は、ゲエティー座で行われた『オイディプス王とすべてのものは流れ行く』というエドウィン・ハミルトン作のクリスマスのためのパントマイムを見て家に帰る途中、52歳なのに、その辺りをあちこち踊り回ったのです！ ジョーンもジェムも彼と同じようにリールを踊るのですが、彼らはこの世を毒づいています。

—— それであの娘かわいいイザベラは何に夢中になっているのか。

—— トリスタン、哀歌、三位一体、汽車です。

—— フン、乙女のページに逆戻りか！

—— はい、おっしゃる通り。

—— もし私が間違っていなければ、あの4人組もまた副次的人物としてその場にいたのではないか。しかし、評議会に軽蔑されながらもその許しを得て、ある恩赦の会の十分目立つ場所に集まり、次回どこでいつ集まるか決めようと、一層やきもきしていたのではないか、この漂流物、投棄物、愚図な大男、遺棄物は。そしてふらつきながら酒を飲み、ケリー【アイルランドの州の一つ】でカドリール、リスタウエル【ケリー州にある町】でランサーズを踊り、いつも5度の音程を保ちながら巨匠の歌手のように歌っていたのではないか。12本の支柱で支えられた台の下で、その支柱から出たり、そこに入ったりする4匹の賢い象のように。

[514]—— あのおなじみの4人組は全員単なるスキャンダル売りです。ノルマンド、デズモンド、オズモンド、ケネスは。至るところで謎めいた歴史話を創っています！

—— 要するに、いかさま師ということか。他の結婚式の宴にも出ていたのか。

—— あの愚図たち全員は、ビッグ・アーサー【HCE】がアンに求婚されて愛の戦場から飛び去った時、悪臭漂う騒がしいパーティーのあちこちでひっくり返っていました。



—— 十分焼かれたレンガが、突然に彼の酒場のプラグから投げ込まれたのか。

—— 地獄の炎に囲まれた棍棒が、突然その場所の明かり取りから蹴り込まれたのです。

—— ヘーパイストス【ギリシャの火神】の金床が転げ落ちるようなものだ。3日間に3回、真空の中へ投げ込まれたのか。

—— パンチを食らったのです！

—— それで、ノアも伝道の書も誰も何もいなかったのか。

—— 誰も何もいませんでした。伝道の書の「で」の字もありませんでした。

—— しかしもし私がその時の彼の姿を見たならば、どのようであったのか。もしお前が彼と知り合いであることを取り消せたなら、どのようになっていたのか。名前を言って彼を呼ぶか、あるいは彼に話しかけよ。そうすればけりがつく！

—— .. 僕は ... その ... 僕は ...

—— お前が立ち会ったのは、乞食の意識改革や、結婚誓約者の偽りや、瞬きする者の目覚めなどではないことをお前は確信しているのだな。

—— まさにその通りです。

—— よければどうか教えてもらいたいのだが、木曜日、ホースにある「小天国亭」に神を恐れる者（下らない）の妻がいた。この者はアダム・フィツアダム伯爵で、タートル人（生まれは）で、南サクヴィル通りとウエストモerland通りに居住し、川のそばのカーライル橋の脇の「生あるドニーブルック保護院」の世話になり、花嫁の付き添い役の女性の守り手であり、花婿の代理人の任命者である。彼は司教を巡る混乱状態に巻き込まれた。すなわち（突如として）暴徒によって密かに射殺されてしまったのだ。【葬式には】花輪もなく。この話の通りかね。

—— おそらく。郵送してもらった借金もありました。保証人もいたりいなかったり。どこにでも。相当額。その大半は総賭け競馬に。完全に田舎臭い話で。

—— そのパーティーには客が殺到していた。あのインク男も。すし詰めだった。グッと腹にくるビールも出ていた。ゲール・スポーツ協会の人間も。そしてパーティーをゲールのなものにするポンチ。ガイ・フォークスも。ランプを持った女性ナイチンゲールも。麦わらのバッグを持った少年も。落ちぶれた老人も。偉大なるスコットランド人も！ 我々もお前たちも、私もお前も、彼らも彼女たちも。彼も彼女も。最も早くから存在する民族が、最も古い国民が、最もアイルランド的なところに。[515] 彼はお前が食い物をほしがっている時、贖罪行為に走っていた。あの蹴られた者、ずる賢くも悔いた良き人間は、何か重要なことを言っていたか。秘密裏にであれ、公然とであれ、あらを探すのであれ、つばを吐きながらであれ、語っていたのか。

—— 単なる金持ちのもっている玉黍貝でしたよ。

—— 一言も言わなかったのか。

—— 残念ながら。

—— 彼は、軽蔑を抱きながら巡らした陰謀にいらだつアイルランド人であったか。そうではなかったか。

—— 何も表に出しませんでした。あざけて！

—— 彼の強さはローデス【ローマの港】を守ったのか。

—— 五体麻痺していました！ あるいはそれに近い状態で。

—— そのことは重視しておきたい。これはアナクロニズムに思われる。そうしたことは密かな語りかけであるが、明らかに中身のないものだ。しかし、それは理にかなった行動でもある。こうしたいい意味での語ることの拒絶は、どうすることもできないくらいに無益で、実際言うのも不必要なくらいにそうではあるけれども、我々はそれを勝手気ままに正当な行為と思うかもしれない。まぶたの筋肉にけいれんを起こすような抑圧を昇華する言葉の使用過程に、幸運にもお前はたいした成功を収めなかったのだ。そのように思えるかね。

—— それはどういったことですか。初めてお聞きしますが。

—— 首尾よくいったのか、いかなかったのか、自問してみよ。短い質問をしているのではない。さて、こんがらからないように、お前の目をカベル・コートに向けよ。お前が見たものは私が見たものでもあるのだから。この壮なる苦闘の目撃者であるお前には、我々のために、できるだけ手短かに、心の目の見方同様厳密でなくともいいから、聖なる名前の持ち主の集団が虐殺されたように虐殺されたホメロスの伝書鳩を通して我々に伝わってきた、これらの陰鬱な戯れがいかにして起ったのかを、再び語ってもらいたいのだ。

—— どのことですか。確か前にも言いましたが、僕は昨夜ずっと酔っぱらって前後不覚だったのです。

—— サア、その前にお前の吟遊詩人的な人を惑わすその声で、その野外戦の全概要を語ってくれ。聞かせてくれ、クリスティーン・ミンストレルズ【アメリカのミュージカル演芸の一種であるミンストレルショーの一座】。2倍知れば3倍分かるようになる。

—— アア、確かに霧を目撃しましたよ。オークショナーのバタービーがかぶるような僕の帽子の周り中が霧でした。

—— サア、これからも話を続けてくれ、ミスター・ボーンズ【ミンストレルショーの中の器楽奏者】、一仕事ギャグのために。お前の障害のある言語とオウムのような言葉遣いで！ 青色の作業着を着た帽子なしの黒人の空白の記憶を。お前はずっと紳士的な詩人であった。ヘイワードン【グラッドストーンの生地】から来た心優しい人物であった。お前はピッチャーのようなカップを持ち、つぎはぎの帽子をかぶった話し好きの人間だったのかね。よろしく話してくれ。半人前のボーンズ君！ 気分よくしゃべってくれ！ 語ってくれ、細かいところまで！ 最後まで話してくれ、[516] こののんびり屋君！ かつて草の上に高く跳

べるキリギリスがいました、という風に。

——それなら、真実をお話ししましょう、議長殿、いかさま師としてのうぬぼれ屋であり、札付きの放蕩者である彼【ジェム】は、西から町の有力者、屠殺業者のマックス・スマシャル・スウィングーのところへやって来ました。金に飽かして着飾り、キルデア地域の鶏のマークのついたタッターソールベストを着、ガラガラヘビ模様のぼろのマフラーを巻き、今見たような凝った衣装を身につけ、骨の髄まで染み透るような音でマアマア上品に『青の服を着て』を口笛で奏で、いつもの自由気ままな様子でブラシ天の詰め物を入れた毛皮の高帽を手に持ち、皆におはようの挨拶をし、足を引きずりながらいつもの道を歩き、本当に全く大層な出で立ちで、兵士に爪をきれいにしておけとか、身なりをちゃんと整えておけ、などと言いながら、白髪まじりの髪に櫛を当て、積み上げられた薪からいきなり燃え立った炎のような、悪臭のひどい乱れた熊の頭髪を粋な突飛なあ髪型に整え、やってきたのです。自分の命を捨てるにせよ、長引かせるにせよ、そうする前に彼が美しい若者の肉体を取り戻したいと思わなかったとしたら、僕の首を差し上げます。いやはや、その後ポケットに拳銃を入れたまま、何と11秒から32秒まで数えると、以前言ったように、確かな話、一人の時に、ハスカーフ【ダブリンを治めた最後のデー人】の悪霊であるコーガン【マイルズ・ド・コーガン、12世紀のダブリンの為政者】のことを、ジョン・ダンの得意分野であるコクニー訛りを使ったということで、時宜を逃さないうちにモンタギューの文句を盗用しながら、けなし続けていました。また無駄口を利いて、何が起こったのか、誰が干し草を燃やしたのか知ろうとしていました。あなたならこう言うでしょうが、この後彼はすべての兄弟殺しの犯人や、郵便馬車の事業を営むパッチ・パーセルのときの価値ある雑用係【ショーン】を殺しかねない勢いでした。この男は、沼底から這い上がってきたような、この雑用係に敵対する人物で、彼の価値が全く分からず、聖人の心の渇きをもって憤怒しつつ、実のところ、この男に関する限り、タルボット通りの隅にじっと動かずに立っただけでした。質屋の件で困り果て、つばを吐こうとし、自分ももちたいと思っている精神的に健全な慣習を産み出す方法を知りたいと思いながら、そうしていたのです。

——その敵対者は、ムアとバージェス【クリスティーマンストレルズのライバル】が歌うメロディーの歌詞に出てくるナップ・オフレルやパター・タンディーのような、サーセン石ほどに重要な人物であるのか。別の言葉で言えば、私にとって異常に思えると言わざるを得ない、そしてこれからも言うであろう、男どうしの流儀に従った、天国で行われる類いの、はっきりと表立つことのない、天使が行うような彼らの間の闘争、互角の戦いのこの劇映画は、物事の常なる成り行きとして、とはいえ贅辞に至る補足的な振る舞いとして始まったのか。

[517]——まさしく。僕ならそのようなことは決してし

ないでしょう。

——では一方のラジオドラマに出てくる耳の聞こえない滓野郎は、沈黙のままその小賢しい役を演じた後、もう一方の口のきけない好ましからざる奴に、様々な機会に意図的にこう言ったのか。お前はお告げの祈りを終えていつもの生活に戻れば、人への接し方においてとんまのへま人間になるので、病院に行った方がいいと。

——確かにユグノーである彼はそう言いました！ 但し、申し訳ありませんが、その言った言葉は「カボチャ頭のうすのろ」だったのですがね。奴は芝生のローンボーリング場から、黒いマスケット銃を威嚇射撃して、あの賭け人間をまさに排除するでしょう。

——その警告は崇高なものだったのだな！

——事実、この劇の作者は殺されてしまいました。

——二人の間で雑言や冷やかしが高まり、その後二人とも一緒に溝へ転げ落ちた時、最初の釘打ち人間は、最後のおしゃべり人間に何かしたのか。ブラック・ピッグの溝【古代アイルランドの防壁】の中で。

——いいえ、彼は相手の頭の後ろをかじっていましたので。

——ではこのとんまは自分の口を磨こうとしていたのか。

——いいえ、でもこの自惚れ屋は彼のペン男の向こう脛を蹴飛ばそうとしていました。

——それはリーヴァヒューム【イギリスの石鹼製造業者】の石鹼をお前が二度と見ることがないとしても、という最もひどい怒鳴り声であり、そしてまた、太陽がもたらすお前の命を救ってやろう、という最良の叫び声であったか。

——実際、実際、彼にできたのはせいぜいそれくらいでした。僕はあまりそのようなことはできませんけれど。

——それは、そのキャプテンのか弱い背中を打ち砕くほどの、強烈なカーライルの当たり具合だったのだ。

——混乱を来しました！

——お前はそれが起ろうとしていたのが、お前の奇妙な形の象限儀で、12時半頃、グリニッジ標準時で午後6時だった、ということに同意するか。

——お尋ねになるおつもりがおありなのでしょうが、ぜひともそうしていただきたいのです。いかがでしょうか。

——午後が1回転宙返りした明日の12時半ということにしようか。

——でも、某所では、それより前の11時半でもあったのですよ、しっかりしてください！

——時間について考えてみよう。いかがかね。あの昇る陽も沈みはするが、皆から忘れられた頃、夜にまた昇るのだ。

——ご親切な言葉をどうもありがとうございました！

11年11月11日ということにしましょう。11月11日に。

——ラリーの日【聖ロレンス・オトゥールの祝祭日】

の3日前だな。お前の時間のどれを使うのかね。左舷ウオッチ、右舷ウオッチ、ドッグウオッチ、デスウオッチ【デスウオッチはシバンムシのこと】の4つのうち。

[518]—— ダンシンク時でお願いします。ラグビースクールにある測候所での時間で。バラストオフィスとボールで。お分かりになりますね。

—— 頼むから相反感情をもつこの争いについて語ってくれ。ドロヘダ通りのルインズ酒場の近くにおいて、100フィート離れた後方で、彼らの影が、色々なことで、自分たちの美德を認めつつも相手の権利には異議を唱えながら激しくもみ合い、これからのアイルランド人のためだと言って自分たちの火薬をぶっ放すのを見た、今でもお前は誓って言えるか。

—— 誓います。見ましたよ。彼らの影はそうしていました。誓って言いますよ。神々しい国民軍のようでした。だからどうかお手をお貸しください。もしそれが完成された者【神】の意志であるならば、僕の舌を飾り立て、切り立った不動の運命についてお話ししましょう。

—— 嘆きのロレンス【・オトゥール】たちよ！ アア、彼らは密かに何らかの偉業を成し遂げたに違いないのに。肉食主義者と菜食主義者との間の戦いのようなこの言い争いの間に。そうは思わないか。

—— はい、そう思います。

—— HCE が関係するホスティッジ・エン지니어ズ社が作った、見栄えの悪いかまど、あるいは炉格子、別名泥炭切り出し具は、このように武器を交えている際、ヤスリが人の手から人の手へとわたるように、何回か持ち主が変わったのか。つまらないことだが。

—— プッ！ どうか謝っておいてくださいね。あれはじょうろの代用品だったのです。

—— 彼らは戦争が終わるものだとすることを知らずに、ただピクト人とスコットランド人とのやり取りのように、あるいはアイルランドの小説中でデーン人の追放を祝うために戯画化された人物たちのように、偶然あるいは必然によって、偽のウィスキーやビールやワインを飲みつつ、お互い反目したり、逆らったりしているだけだったのか。どうか教えてくれ。

—— それだけだったのです。というのも、トスカナ地方の人間が話すラテン語のような正しい言葉で言うならば、彼はきわめて高潔な人物、ウェルキンガトリタス【シーザーに反逆したガリアの指揮官】のような人物だったからです。

—— つまり、結局はモーガン家とドララン家の争いのようなものか。

—— 結局そういうものではないと思っておいでなんでしょう。

—— 過去の野蛮人を土台として築かれた未来の農民だったのか。タン・ドネリー【プロボクサー】のような。

—— そのとおりです。ドネリーです。

—— しかし、この争いは和解という報酬を与えたのか。

本物のワインを飲みつつ。混沌から生まれた秩序となったのか。それでよろしいか。

—— アア、素晴らしい！ アア、敬虔な！ アア、純粋な！【戦いなのです。】【ヴィーコの使った宗教戦争を表す形容詞】アーメン。そして我々の間には手作りの壁があるのです。パルパ【ガリアに壁を築こうとしたローマ人】に感謝のビールを！

—— それでもともかくも、その争いはクリスマスでも耳にする、地獄の響きのような忌まわしい音を響かせるであろうとお前は言うのか。

[519]—— しかしともかくも、あなたが罪を犯したならば、ヨーロッパ人に知られている墮天使が立てるような、地獄の音を立ててそれは響き渡るでしょう。ご用心ください！

—— そして守護聖人の祭りの際演じられる、他者と自己についての、豚と雑魚が出て来る革新的なパントマイムは、まる一週間、聖ロレンス・オトゥール祝祭日の後の夜な夜なに、お前のでたらめな話によれば、ドーラ・オーハギンズや、バトラー一家と呼ばれたオーモンド伯爵や、マッククラウド軍の騎兵隊に応酬したオヘファーンズ軍の砲兵隊に対して、1001回も、強烈さを増しつつ、悪意あるつばを吐きかけながら続いたのか。ラッドがロンドンの基礎を作ったのと同じくらい長い期間、おそらく何年も何年も。

—— その通りです。こうしたこと【争い】が彼の長い人生であり、僕の人生の一コマであり、彼女が覗き見た二つの小事なのです。4番目の男の2番目の足の最後の指から、最初の男の最後の足の1番目の指までを覗き見たのです。その通りなのです。

—— 可笑しい。非常に、非常に可笑しい。

—— 可笑しく見えるかもしれませんが、こんなものなのですよ。

—— あまり好ましいことではないね、薄っぺらの真鍮君、中指を立てて愚弄したり、ののしったり、舞台外から台詞を教えてもらったり、アドリブを言ったりするのはね！ また早口でまくしたてたり、暴れ回ったり、騒がしくするのはね！ 私が眠りながら舵を取るとでも思っているのかね。いいかい、ペルファストの堂々とした背の高い偉大なる陪審員に向かって誓いながら、次のように言うつもりなのかね。また長い時間耐えながら、全力を尽くして、我々に次のことを信じてくれと頼むのかい、小便垂れ君。ヨークの証人尋問官マークウォーターの前で、ずっと大雨が降り続いていたと宣誓証言をしたすぐ後に、毎晩毎晩、おそらく何年も何年も、丘や山頂には月が輝き、勝利の風が吹いていたと。

—— おそらくそうなのでしょう。ローマ・カトリック教徒の偉大なるあなたが正式に断言しているのですから。本当にこんなことは考えもしませんでしたよ。今はそうだとちゃんと考えています。思うにね。訴訟を起こされない限りは。もしお尋ねになるのなら、どんなことがあっても蔑ろにしてはならないことについて考えることは、僕に

とっては慈善活動なのだとお答えします。僕の友人のターペイさんから、挨拶の返礼として、40日間の免償を伴う3時のミサの後、靈感を受けた言葉として次のことを聞かされたのです。ターティおばさんの邸宅にいる病人のライアン夫人に、神の恩寵としての雨が集中的に降り、彼女はつぶぬれになるとね。そしてまた同じように、国教拒否者である彼は僕に、礼拝者が200人跪いているミサで講話した後、バーがまだこっそりと開いていて、明るさが残っている一日の分れ目の時間に、次のような話をしてくれたのです。[520]彼が言うには、フェニックスパークの中を、彼女が言うには、ターペイさんはいつも散歩をし、彼女が言うには、その時の彼は獐猛なトルコ人のようで、彼の養樹園で締まりのない格好をし、そして、アア、このような様相で彼は火曜日にマイケル・クラリー氏に会ったのです。そのクラリー氏の話によると、マックグレゴール神父は、すぐ近くにかがわしい場所があることに絶望的な気分になっていて、そして豪雨のこと、猫の足が彼の耳にぶつかったこと、公衆便所がそこにある器具を乱暴に扱った人物に占有され、数ヶ月間鍵をかけられてしまったことをまくしたてたそうです。そこでターペイさんはディナージャケットを着て、ボルサリーノの帽子をかぶり、押っ取り刀で寺院に行き、マックグレゴール神父にお目にかかったのですが、何と、ターペイさんはパイプを吹かし、この聖職者に挨拶すると、告解室にあった3シリングについての絶対的真實を、この聖なる彼に全面的に話したのです。そして茶殻占い師のライアン夫人がいかに不信心者であるかをも口にしました。彼女はパラグアイからもってきた持参金と、あの中庭の近くに置いてあった施し物から金を取り出し、聖ペテロの祝日での献金のためと言って、マーチン・クラリー氏に3シリングを渡すことを約束したそうなのです。彼女が献金しようとしたのは、マシュー神父が、木曜日のうちにアフリカ人のために、聖人のための真夜中のミサをあげようとしたのですが、その際神父は子供のブラウンに手伝わせ、ブラウン一人その場に残し、そのために兵士や不信心者や不信仰者が厄介なことを引き起こしたり、エクルズ通りの娼婦がロバの鳴き声のような、今まで以上に途轍もなくひどいフルートの音を出したからだということでした、我が大黒柱さん！ でも僕は決してケチなどつけませんでしたよ！ 残念なことに！

—— いつものように怒りを感じるものの、お前の言っていることは正しい、無為なるケルト人君。この世界は虚無と、不確実と、非現実の世界なのだ。では兄弟というのは互いに畏敬すべきなのか。

—— それなら、ガソリンで車を走らせ、目の前のダブリンまでハンドル操作をしている間、全部で8人兄弟になってくださいよ。でも純粋な真なる愛など、美しい小川においても決して遭えるものではありませんよ。

—— 馬鹿なことを言うな！ お前のような足の不自由な存在が、どの丘で跳ね回ろうというのか！ 懲らしめてやる！ お前は新たに備わった洞察力で、その日はこう

だったと誓って言ったり、断言したりするか。最初見た時に、彼の南部訛りを使ってお前が断定的に公言したすべてのことが、無意味なことだったということをお前は否定するか。諾か否か。

—— 諾と言います。僕のこの聖なる唇を、滑らかに読める聖アルスターの年代記の上に絶えず乗せながら、実際、真にそうだったと、誓って断言します。

—— それは大変結構なことだ、ローマ・カトリック教徒君！ 大風呂敷の口を持った若造君、この誓いと引き換えに、輝くお札とかペーパーミント入りの砂糖菓子をどれくらいたくさんもらおうとしているのか、言ってもらってもかまわないかね。[521] 数ポンドかね、坊や。

—— ジャガイモの根っこほどの額です。ほら、この通りですよ。全くのゼロです。アア、酒飲みさんたち、このような呼称を使うのも、あなた方閣下たちに、あなた方がそのような酔った顔をしているとお知らせするのがいいかと思ひましてね。僕の方は酔ってはいません。金門橋があるのと同じくらい真實です。合計ゼロポンド、ゼロペンスなのです。その忌々しい下らないもの全体に対して、一個の鏡も、山賊のズボンほどの額も、ミュンスター旗の三つの王冠の模様ほどももらいません（その酒は胸が悪くなるような酒ではないですか）！

—— サアサア、ジョニー！ 我々が生まれたのは昨日などではないのだ。多くのものを受け取ったのだから、我々は何のお返しをして差し上げようか。君のそのスコットランド人のような弁髪スタイルに賭けて、度数の高いアルコール飲料を、馬をも殺すような酒を、生やボトルで、ジョーンズ通りかジェイムズ門にある「鴉とシュガーローフ亭」で飲ませてやると、何度も君は約束してもらったと言ってもらいたい、ともかく。

—— 一体全体どうしてそのようなことを言うのですかな！ ちょっとの間でも頭を働かせているのかね。いや、君の言う通りだ。全く必然的に本当のことだ！ フェアプレーでやってもらえないかね！ いつそうしてくれるのか。

—— 「鳩と鴉亭」、これでは駄目か、どうなのだ。喉を潤すには。

—— 水ですよ、水、汚い水ですよ！ チャペリゾッドのあそこで出すものは！ 痛めつけられ退散しますよ！

—— いかなる害が酒につきまとうというのか、しかしながらいかなる害が酒を必要とするというのか！ もし率直な評価を恐れないのなら、お前の正当な名前を耳にしたらどうかね、私の悲しみの吟遊詩人ガッツィ・パワー君【フランク・ガッツィ・パワーはダブリンのジャーナリスト、諧謔家】。

—— フランク某の火薬も悪性の腫瘍も僕は恐れてなんかいません。

—— そいつはお前のおじさんか！

—— あなたがだました人物ですよ！

—— その言葉を外で、ラインスターやコナハトやミュ

ンスターで、私に繰り返してみろ。

——あなたが少しばかり叫んだ後で。都合がいい時にそうしますよ、ペテン師さん。

—— よろしい！ 勝負だ！ 3対1の賭け金で！ いいか。

—— 嫌ですよ、絶対に、エマニア【アルスターの古代の首都】の略奪者さん！ 何をなさろうというのですか。閣下、どういうおつもりなのですか！ フェニアンに対してはフェアプレーをお願いします！ 僕は僕なりにやりますよ。絶対に卑怯なまねはなさらないでしょうね、殿下。【そういうことをなさったら】クウィーンズ通りを通過して海上に出てしまいますよ。さようなら、でも永遠に、ってね！ さようなら、ってね！

[522]—— 自分には関係のないことだと言うのなら、銃弾を一発お前の頭にお見舞いして網の目状態にしてやるぞ、どうなんだ、おい。

—— 分かりませんね、僕には。閣下殿、お尋ねにはならないでください、どうか。

—— 穏やかにしゃべりたまえ、北アイルランドの紳士君！ アルスターの赤い手を愛したまえ【赤い手は北アイルランドの紋章】！ もう一度質問しよう。話の中には浅ましい話があるのだ、そのことははっきりと分かっているかね。さて別の件だ。うさんくさいれ込みがあったにせよ、単に酒に任せたのにせよ、お前は、人との衝突をうまく受け流すことのできるあの二人のクリミア人のうちの一人、あの背の高い方が、ある罪で、あるいは二つの重大なとがめのうちの一方で——この件に関しては、激しい論争が湧き起っていて、二つの選択肢のうちのどちらでも好きな方をとればいい——告発されたのを知っていたのか。どうだったのかね、この悪党君。

—— 色々なことをご存知なのですね。おまけに（今や重大なことですが）障子に目ありときている。このことは覚えておいてくださいね。ヤレヤレ！

—— お前なりに選ぶとしたら、次の二つのうちどちらの道徳的退廃を選ぶか。シェバの女王の前で雄牛を演じることか、それともパントマイムの馬の後ろ足を演じることか。お前の多岐にわたる家系の中に、定期的にオレンジ色の下着をつけたストリッパーやお盛んな助平爺が現れることはあるか。

—— 知っている訳がないでしょう！ 劣情男と痴女の関係になるには、どれくらいその家の金が欲しいのか次第でしょう。ヤレヤレ！

—— ヤレヤレとはどういう意味なのか！ いいか、そんなことを言う必要はないのだ、この口やかましい小僧め。

—— 意味なんか一つもありません。言いたいことの主要な部分のみがふさわしい場所に収まるのです。下らないことは言わないでください。嫌だ、嫌だ！

—— 何だと。

—— 僕に質問を浴びせるのをあなたは楽しんでるのではないですか。口には出しませんでしたかね、閣下。心

の中では自分に言い聞かせることがあるのですよ。

—— 実際お前は拷問にかけるべき困った証人だ。しかしこれは笑うべき事柄ではない。おまけに我々のことを、直感力が音痴状態になっていると思っているのか。お前はブレイという音からブレインの意味を感知することができないのか。お前は専門家特有のナルシズムと脂肪腎人種がもつ倒錯性との間の、ホモセクシュアル的カセクシスの感情移入を行っている。精神分析でも受けろ。

—— いや、何とということでしょう、髪が褐色である、コーカサス人と黒人との間にできた子の様なあなたから、専門の乳母がもつような同情など受けたくはありません。あなたや他の薄のろ盗人に干渉されなくとも（あなたたちは皆昼行灯だ！）、都合のいい時に自分の精神分析ができますので。

[523]—— 簡単なことだよ！ お易い御用だ！

—— 回答者君、お前は今までにどんな意図をもった悪であれ、どういう訳か、最後には大多数の人にとって善となることがあると考えたことはあるか。

—— 「せいてはことを為損じる」の格言から言って、また布告されるだけであれ、実際に行われるのであれ、挙手によるきわめて重大な国民投票の点から言って、セント・アイヴズから出てきたこの被告人には、犯した罪と同じ程度の罪を犯される（受け身形を使うのは嫌なものだが）可能性があった、そしてまたあるということをお前は考えつかなかったのかね。というのも、言葉の上でこのことを考える限り、とんでもなくひどいものも——このモットーをどうか読み聞かせてやってくれ——、すべてそれ自身の二つの眼球から見れば魅力的であるといった、積極的に真実を示す言葉、それが一つもないからだ。サア、長い時間をかけて、しっかりと形作って、完璧に再構築せよ。

—— 比類なき同国人であり、数々の勝負師たちと渡り合い、多くの勝ち馬、負け馬を経験し、「ジョン・ジェイムソン・アンド・サン」のウイスキーに訓練され、妖婦たちに育てられた、ホッチキス文化の万人である HCE は、正午から夜明けまで、そしてまた夜明けから正午までの間、「ベイ館」（ダブリンの）、そしてまた、「マックマンニガン嬢あるいは夫人館」で種馬となっているでしょう。

—— 頭のいい豆粒君、できたら説明してくれないか。中途半端だと全部が必要になる。

—— 通常話は続けるものであるがゆえに、そしてまたあなたのたつての要請への特別な計らいとして、次のことを明言致しましょう。紳士方、淑女方、友人たちはにやりとするでしょうが、通俗的な詩に異常な程にのめり込み、「西の貧民窟」で行われたいくつかの住民投票に大いに関心を持っている僕の親友のフリスキー・ショーティーと僕は、喜んで仲間たちと一緒にここに戻ってきて、「ドダキャン・イーズハウス亭」で、あの老いたアングロサクソン王国の問題の人物と、彼の道徳的墮落——インフルエンザ、疱瘡、梅毒、はしか、急な激痛、腹痛、後淋、腸吸収不完全、カリエス、狂犬病、おたふく風邪、憂鬱症に値する——

について親しく議論を尽し、そこの主人と楽しくしゃべりあったのです。私とフリスキーが意見を同じくしたこと、そしてまた主人は言うまでもなく、いつもの2倍となって集まった我ら一行が、反対意見もなく騒がしい議論の結論として知りたがったことは次のようなことでした。倫理にかかわる行為として挙げられるし、証拠もあることですが、彼が北分署の前で、男性兵士たちとかかわり合いながら、同時に、過激な娼婦たち——実際はかわいらしい少女たちなのです——と一般的あるいは中立的立場でかわり合いながら、いかがわしい愚行をとったらしいということです。[524] この遺憾な不祥事に関して、この都会人であるフリスキーは娼婦との接触をきわめて適切に判断しており、自由意志による印象的な行為ではあるが、我々の大事な自然公園における花火やサッカー競技の部類を規制している法律に照らし合わせると、厳密に言えば森林局および労働局の付帯事項に違反しているとしています。このことを追求しようと、警察の代理者である僕とフランキーは、何と、最大の責務として、この【性的に】火がつくことについて聞くために、コピンガー氏という名前の尊ぶべき紳士に近づいたのです。第一級の人物たちに関する彼のこの良書が述べていることについて、つまり早期の男女両性性の長所について、彼が僕とフランキーにしてくれた肯定的、否定的、限定的説明のなかで——おまけに彼はイングランドの住人であり、サセックス岬の崖に面したところにこぎれいな軒屋「神を愛する者」をもっているJ.P. コックショット氏という名前の貴重な友人が渡してくれた、価値を認められた聖句集を引用しつつ、会う約束をしていた、平型捺印証書と誓約に使う帯状の正式証書の現在の保持者であるこのコックショット氏が彼にした憶測の入った話を、断言的にしてくれたのですが——尊師コピンガーは風に向けた目で、ニシンの最長10数マイルにも及ぶくさび形の群れが、ブローター・ネイズのそばを12時から超自然的に通り過ぎる光景をそれだけははっきりと見たように思われ、辺りが静まり返っている中、その様が1時間ごとに彼を魅了したという話をしてくれました。尾をひねり、背を水中に入れつつ、ぶつかったり、突進したり、体を張ったり、後ずさりしたり、飛び跳ねたり、縮こまったり、体を揺らしたり、突っ走ったり、さっと動いたり、跳ね上がったり、水を撥ねかけたりするのです。尊師である彼が言うには、社会主義者の権力者以上に幾分問題なのは、いまましいことですが、あのニシンがウェセックスの奴らが考えているよりも狡猾で、彼らが捕まえようとしているかわいい相手、ピチピチとしたオイタさんたち、エラを輝かせたみだらかなかわいい者たちをひっくり返し手に入れてしまう、彼らのイワシたちに、かわいいギャロップの踊り手である二年子サケたちにいたずらをするということなのです。そして尊師がもっと力を込めて言うには、ゼウスよ、我を助けたまえ、と彼は言います、その体臭を夕食時の魚料理の悪臭としながら、彼らの鱗の曲線は彼女たち可愛い塩水に住む者の心を打ち据え、その胸びれの常なる派手さは彼女た

ちを悩ます、と彼は言います、そして最も明白なこと、卵が輪縄の下の標的落とし的的となっているのと同じくらいに確かなことは、彼ら純然たる頭のおかしな連中は、すべてリビドーにとらわれた連中であり、子供の頃の両性愛性を示すような、もだえるような、不快な興奮状態で襲いかかってくるのだそうです。[525] このようにして自分は、偏屈な、素朴な教義の核的倫理を視覚化したとコピンガー尊師は言います。黒く汚れたあなた方の洗面所で、毎朝綿密にあなた方の顔をご覧なさい。ラティー博士が証言しているところでは、先天的な肉欲を克服するには、冷たい水が強く推奨されているようですよ。導いてください、ニシンの群れを！

—— お前もお前のアリア人的交尾も地獄に堕ちてしまえ、バルバドス島【クロムウェルが征服したアイルランド人を追放した場所】に行っちゃえ！ 異端児め！ 反抗児め！ モントゴメリー派め！【ヘンリー・モントゴメリーはアルスターに反体制的宗派の宗教会議を設立】お前の親戚など早くくたばっちゃえ！ 実際大風呂敷と脳タリンからお前は逃れられないのだ。

—— ちょっと待て、この虚言唇。自己中心的なアナキズムの匂いがする！ 怪しからん奴だ。お前の正確とも言えぬ説明はほとんど理解できない代物だ。それはカワマスだったのかレイクトラウトだったのか。この錆び付いた魚の話で袋小路の未来に私を連れて行こうというのだな。

—— お前はしゃべりすぎてしまったようだな。生き生きとした愛らしいローラ・モンテ【ルードヴィッヒ1世の妾】のように。

—— 奴が首謀者なのですよ。密かにフェニアン黨員になったと言われています。バラソル・アイラリーという名前。産卵して7つの教区にある教会すべてを、陽気な君主チャールズ2世のようにフライ揚げにしまうのです！ そしてこのみだらな郡をダンスや色目や愚者で満たしてしまうのです！

—— それを今記録せよ、オスティー！ 背中のお前のお前のトレードマークだな！ ラニーミード【マグナカルタの起草地】への上陸を果たそうとして！ 雷魚よ、大きなマスよ、そうではないか。

—— 泣くように賛美歌を唱える老いたサケがいる。幅の広いズボンをはいた時代遅れの頑固者だ。

船いっぱいザーメンをつめ込み、喘ぎながら進み、大分たってから、欲望のあまり飛び上がり、ホース岬とハンバー川河口でリフィーを濡らす。

我らの人間アナゴ、我らの人間ウナギ、HCE！

—— やっちゃえ！ 奴が網に引っかかっているのが目に浮かぶ。むちをくれてやれ。あいつを取り押さえろ！ いたぶってやれ、イワシ野郎を！ ナマズ野郎を！

—— 君、釣り上げてくださいな！ 生きた昆虫を餌にすればできることだ。マーリン【アイルランドの北端】の長いウナギを。皮を剥がれる前に奴は泣き出すでしょうね。そして奴の涙は新たな島となる。その島が高くなったかっ

て？ すごくね、肺魚の奴め！ 大きなヒレは山のようになるかもしれない！ 荒地地に3重になって！ 軍艦みたいに！

——この一寸法師である彼は彼女の唇が恋しくて、ロープを撚りながらディー川の中に立っていたのです。彼女をだましおべっかを使えば、どんな背の低い男でも彼女をとらえられるでしょうから。いや、彼はスケートで滑っているかのようにさっとやってきて、恐れを抱くこともなく、彼女の帷子の上に乗っかり、[526]リフィーの土手に住む蛇どもが砂の枕に彼の頭を乗せて彼を何度もいたぶることなど、全く恐れていませんでした。

——蛇たちがそうすると言うのか。

——必ずそうしますよ。

——揺らめくスゲの間でそうするのか。風にたなびくスゲの間で。

——あるいはその下の、イグサの生えたチューリップの苗床で。

——暗くなってからお前がマグを洗いに行くところか。

——真っ先に行くところです。田舎のトゥーミーが、若者のトミーが。

——泡立つ川のそばか。あのブクブクと泡立つ川のほとりか。

——まさにそのとおりです。

——近衛兵のことがだね。どうか私に話してくれないか。この策略家たち、あるいは釣り師たちはあの第三者【HCE】とともにいたのかね。ともに居合わせていたのかね。それともそうではなかったのかね。

——三人一塊。一人と三人。

**シェムとショーン、そして彼らを引き裂く恥知らず。  
英知の息子、愚行の兄弟。**

——お前の精神に神の祝福あれ！ まどろっこしい話し手君！ それは3人の割れ目はめ屋たちで、炭焼き屋では全くなかったのだね。お前はあの気取った男子たち相手にならなくて面白いがる女子のことを忘れていた。散歩好きのヨハネ導師よ、どうだろう。もっている力全部を発揮して我々と向き合ってくれませんかね！ マスクをつけた君の中身をさらけ出してくれませんかね！

——ナイーブなキリスト教徒なんだろうね！ 悲しみは次々にやってくると、ウォーデン・デーリーは言っている。女は荒野をさまようだろう。そして谷間の乙女は栄光の地へと赴くだろう。二人のストリッパーに等しい女スティラ・アンダーウッドとモス・マクガリーのパーメイドたちとともに、栄光がフェニックスパークのファーリー・グレンに生えているシャジクソウの中に潜んでいたと、確かに私は思っていた。あの時彼は短刀を手にしてそこにいた。そして彼らの母親は、こう理解したいのだが、有り余る髪と王妃のような態度をとってはいたものの、膝むき出しの雑役婦だった。あの女はいつも彼にのめり込んでいた。彼女の最初のクロヴィース1世【メロビング朝フランク王国初代の王】である彼に、ローズカーモン州カリック・オ

ン・シャノンのもも噂の広まっていた男に。確かに彼女は自分自身を賛美する、ボンズ・コールドクリーム的快感にほとんど溺れていたと言ってもいい。その溺れ具合は私のターペイ師の親戚であるヴェスタ・タリーと同じくらいひどいもので、小川に映った乱れた自分の姿を見、それに向かってしかめ面をしたり、水を浴びたりし、その姿をうれしがり、誇らしく思ったりして、柳の下ですっかり舞い上がり、芝居気たっぷりに振る舞っていた。ロッホ・シーリーン【アイルランド中央部、ウェストミース州周辺の湖】の愛人という訳だ！

——フン、変な女だな！ 全部自分だけのものというのだな！ ナルシズムは倒錯の娘のようなものだ。後に部屋付きメイドとなった笑いの国のアリスか。

[527]——チャペリゾッド、すなわちイズルデ【チャペリゾッドは「イズルデの教会」という意味】に関しても同じであるように思えるだろうか。そうだろう？ 言ってみろ。何をぼんやりと考えているのか。

## (注)

『フィネガンズ・ウェイク』の原典は、James Joyce, *Finnegans Wake* (New York: Viking Press, 1947) を使用した。本文中の [ ] 内の数字は、*Finnegans Wake* の原典のページを表す。【 】内の日本語は、該当箇所の内容を筆者なりに解説したものである。( ) 内の日本語は、原典の ( ) 内を訳したものである。参考文献としては、以下の書を使用した。

1. Campbell, Joseph and Henry Morton Robinson. *A Skeleton Key to Finnegans Wake*. rpt. New York: Viking Press, 1944.
2. Rose, Danis and John O'Hanlon. *Understanding Finnegans Wake: A Guide to the Narrative of James Joyce's Masterpiece*. New York: Garland Publishing, 1982.
3. McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. Revised edn. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1991.
4. Glasheen, Adaline. *A Third Census of Finnegans Wake*. Evanston: Northwestern University Press, 1963.
5. Mink, Louis O. *A Finnegans Wake Gazetteer*. Bloomington and London: Indiana University Press, 1978.
6. 柳瀬尚紀訳、『フィネガンズ・ウェイク』I、II、III、IV、河出書房新社、1991年
7. 宮田恭子訳、『抄訳、フィネガンズ・ウェイク』集英社、2004年
8. Slepon, Raphael, ed. *The Finnegans Wake Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.
9. *Glosses of Finnegans Wake*, Website.

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』  
第3部第3章の概要(2)

大島 由紀夫

(東京海洋大学大学院海洋工学系海事システム工学部門)

**要旨：** ジェイムズ・ジョイス著『フィネガンズ・ウェイク』の第3部第3章の501ページ7行目から527ページの2行目までを訳出した。逐語的に訳したところもあるが、内容をくみとりながらその主意を表したところもあり、「概要」といった題名にした。この訳出した箇所では、ヨーンとなったショー  
ンに対する、4人の博士の尋問の様子が記されてある。

**キーワード：** フィネガンズ・ウェイク、第3部第3章、概要